せう、撫子などが咲いてゐます、ですから私は蔭の所に立つてゐたのです、私は目を移して足を見ましたすると、左の足の大腿部——水の當る部分がバーントシーナの淡い彩色で、その蔭影になる部分は、ウヲルトラマリンとプラツシヤンブリユーとの混色が極々、鮮明に現はれました、唯關節の最も大なる陰影のみが、矢張强いバーントシーナにライトレツドの閃でしたここで十分餘も立つてゐましたらう、向の筏の上に遊んでゐる小供の聲がハツキリと聞えます

「あの人は何を見てるのだらう」

○今度は向ひ岸に渡つて磧原に坐りました、私の地平線は殆ど水面に近いのです、

先の雲がいつしか東に立つて、虛穹唯何らの妨もありませんでした、白日は、意のまゝに振舞つてゐます、碧潭一里、水は夢みる兒の笑顏の樣に、小い唇を動かせてゐます、蒼穹が靜な水に移りました、水面は鮮かなパープルで影の部分がバイオレツトに彩どられました、波も立たず閃もない、私は磧原を東にポツ〳〵と歩みかけました

それでは筆を止めますよ御免——(大和、石田桂雨)

○

みづのいろ〳〵

水は外物を假りて、多く趣をなす、溢流に橋の架する、亭樹の水に臨む、紅燈の水に映ずる、流螢の水面を飛ぶ、小艇の水に泛ぶ、漁夫の綱を飜す、兒童の綸を垂る、水禽の水を掠めて飛ぶ、皆水に趣を添ふ。

影の水に映じて趣味あるもの、曰く帆影、曰く橋影、曰く山影、曰く塔影、曰く花影、曰く月影、曰く燈影、曰く雲影、曰く樓影、曰く鳥影。

聲の水を渡りて趣あるもの、曰く櫓聲、曰く鐘聲、曰く絃聲、曰く款乃、曰く笛聲、曰く禽聲、曰く擣衣聲。

夜雨一過、街上燈光滿地、吾此光景を愛す。

夜水は活氣なし、唯だ燈影の落村を得て、活氣あり。

(日本人第五百十七號、市島春樹)

○

水にうつる影には二通りある

水の面には、一つの物體が同時に二通りの影になつて映ります。雨天の日などには、そんなことは有りませんが……否や!……あるのはたしかにあるのでせう、けれども太陽の光線が弱い爲めに見えません

例て一寸此の處に、一本の青々とした綠の木が池邊に有るとしますと、淸く澄んだ水の面には見るから凉しさうな青々とした木の影が、漂ふて居ませう

普通畫には、この影のみしか、かいて有りませせん、然し氣をよく付けて見ると、もひつと影が映つて居ます、その影は美しくは有りません。

ちよつと見た所では灰色をして居ます、この影は、人の影が地面に薄黑くつうつるでせう